

研究と支援の両輪による取り組み

「男女共同参画支援ステーション」は2012年度に設置され、女性研究者の研究活動を支援する業務を行っています。Vita-min(the Station for Vitalizing Your Challenging Mind)という愛称があり、しあわせぶんたんのビタミンとして、チャレンジする人のキャリアを応援しています。相談コーナーを設置して研究職のキャリアや家事と仕事の両立などについての相談対応を行なうほか、研究支援員制度や一時託児など支援のための制度設計を行なって学内の環境整備に取り組み、研究者の育成と支援を行なってきました。

女性はリーダーシップをとる機会や学ぶ経験が少ないとから、女性がリーダーシップを磨くセミナーを実施してきました。教職員の要望から育休セミナーを企画したりと、現場の声や相談をもとにして男性も女性も働きやすい制度の設計を行なっています。

教育・研究分野に重点を置いていて「男女共同参画社会を考える」講義では、代表担当の私を含め、複数の先生とともに男女機会均等やジェンダー公正について考えていきます。私が担当する人文社会科学部専門科目の「男女共同参画の哲学」では性差の思想史を扱い、哲学史の中で女性／男性が、感性／理性に二分されてきた歴史を検討します。人文社会科学部のゼミでは、女性や黒人に大学入学や就職が優先的に措置される積極的正措置の是非をめぐって学生たちと議論しています。このような教育によって、学生の皆さんが出たときに、性別にとらわれ

れずに何をやりたいのか、どう生きたいのかを考えるために意義があります。

ジェンダー平等を新たな学問分野として確立することに取り組み、哲学分野の取り組みを科研費によって研究成果報告したり、学術雑誌『理想』の男女共同参画特集号を企画してミソジニー(女性嫌い)の構造を研究したりしました。哲学分野を中心となり、人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(GEAHSS)設立にも携わりました。特に人文社会系の女性は大学院修了者比率は4割を超えるにもかかわらず、大学教員比率は3割程度であり、非常勤等不安定な雇用環境の中でハラスメントに晒されています。背景には、教育研究環境での無意識のバイアスがあり、このような現状について、政府に対して要望提出を行なってきました。

男女共同参画を実現するためには、無意識のジェンダーバイアスが存在することへの理解を一般に広めていく必要があります。研究は歴史世界と競争する孤独な取組であり、研究者は生きていく中で個人的なあらゆる生活場面と葛藤して苦しみながらその成果を醸成していきます。私の専門とする近代ドイツの哲学者ヘーゲルは、現実と理想世界との分裂や矛盾を露呈させて、例えば、周縁にある女性だからこそ見ることのできる真実をイロニー(皮肉)的な視点で暴露させていきます。これからも研究のあるべき理論と、女性研究者が生きていくために必要な支援という実践との亀裂や矛盾を統合しながら取り組みを進めています。

男女共同参画支援ステーション

Vita-min

the Station for Vitalizing Your Challenging Mind



研究職を目指す学生のためのキャリアワークショップ

安全・安心機構
男女共同参画推進室
男女共同参画支援
ステーション長
(教育研究部人文社会科学系
人文社会科学部門
准教授)



こじま ゆうこ
小島 優子

神奈川県出身。東京大学大学院人文社会科学研究科修士、上智大学大学院哲学研究科博士修了。博士(哲学)。2012年、高知大学に着任。日本学術会議連携会員(第25期・26期)。「日本学術会議を通じて政府に提言を行いつつ世論啓発することで、ジェンダー平等の実現に携わっていきます」